

聖大金曜日 早課 十二福音 『三歌斎経』 P1081

——我が主イイス、ハリストスの救を施す聖なる受難の奉事式——

聖大木曜日の晩に、定刻に及びて鐘を撞く。衆聖堂に集り、司祭祝讃して後、常例の如く始む、我等聖堂に集まりて、司祭常例の如く始む。誦経者誦す、「天の王」、聖三祝文、「天に在す」、主憐めよ、十二次。光荣、今も、来れ我等の王神に叩拜せん、其他、第十九及び二十聖詠。常例の讃詞、及び聯禱。

司祭 我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、

誦経 「アミン」

我等の神よ、光荣は爾に帰す、光荣は爾に帰す。

【天の王】

天の王、慰むる者よ、真実の神^o、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善の宝蔵なる者、生命を賜ふ主よ、来りて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の霊を救ひ給へ。

【聖三祝文】【至聖三者】【天主経】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(三次)

光荣は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世世に、「アミン」

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。(三次)

光荣は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世世に、「アミン」

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の国は来り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋国と権能と光荣は爾父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世世に。

誦経 「アミン」

主憐めよ。(三次)

光荣は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、「アミン」

来たれ、我等の王・神に叩拜せん。

来たれ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

来たれ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

【第19聖詠】

願はくは主は憂の日に於て爾に聴き、イヤコフの神の名は爾を扞ぎ衛らん。願はくは聖所より助を爾に遣し、シオンより爾を固めん。願わくは爾が悉くの献物を記憶し、爾の燔祭を肥えたる物とせん。願はくは主は爾の心に循ひて爾に与へ、爾の謀る所を悉く遂げしめん。我等は爾の救を喜び、吾が神の名に依りて旌を揚げん。願はくは主は爾が悉くの願を成就せしめん。今我が其膏つけられし者を救ふを知れり、彼は聖天より其救の右の手の力を以て之に對ふ。或は車を以て、或は馬を以て誇る者あり。唯我等は主我が神の名を以て誇る。彼等は動きて顛れ、唯我等は起きて直く立つ。主よ、王を救へ、又我等が爾に呼ばん時、我等に聴き給へ。

【第 20 聖詠】

主よ、王は爾の力を楽しみ、爾の救を歎ぶこと極なし。其心に望む所は、爾之を与へ、其口に求むる所は爾之を辭まざりき。蓋爾は仁慈の祝福を以て彼を迓へ、純金の冠を其首に冠らせり。彼生命を爾に求めしに、爾之に世世の壽を賜えり。彼の榮は爾の救を以て大なり、爾は尊榮と威嚴とを之に被らせたり。爾は彼に祝福を世世に賜ひ、爾が顔の歡にて彼を楽しませたり。蓋王は主を頼み、至上者の仁慈に因りて動かざらん。爾の手は爾が悉くの敵を尋ね出し、爾の右の手は凡そ爾を憎む者を尋ね出さん。爾怒る時、彼等を火炉の如くなさん。主は其怒に於て彼等を滅し、火は彼等を嘔まん。爾は彼等の果を地より絶ち、彼等の種を人の子の中より絶たん、蓋彼等は爾に向ひて悪事を企て、謀を設けたれども、之を遂ぐる事能わざりき。爾彼等を立てて的となし。爾の弓を以て矢を其面に發たん。主よ、爾の力を以て自ら挙げ、我等は爾の権能を歌頌讚榮せん。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

【聖三祝文】【至聖三者】【天主經】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の国は来り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に与へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋国と権能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經 「アミン」。

【讀詞】

主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ、＜我が国に福を与え＞、爾の十字架にて爾の住所を護り給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す。

甘んじて十字架に上げられしハリストス神よ、爾が同名の新なる住所に爾の恵を垂れ給へ、爾の力を以て＜我が国に福を与え＞、其諸敵に勝たしめ給へ、彼は爾が和平の武器、勝たれぬ勝を以て其助とすればなり。

今も何時も世世に、「アミン」。

威嚴にして耻を得しめざる轉達、至善にして讚榮せらるる生神女よ、我等の祈祷を斥けず、正教の人の住所を固め、爾が国権を執らしむる＜者＞を救ひて、天より勝利を与へ給へ、独恩寵に満たさるる者よ、爾神を生みたればなり。

【重聯禱】

輔祭 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐め、爾に祈る、聆き納れて憐めよ。（詠）主憐めよ。三次

輔祭 又吾が<国の天皇及び国を司る者の>為に祈る。 (詠) 主憐めよ。三次
輔祭 又教会を司る尊貴なる我等の () 主教(某) の為に祈る。 (詠) 主憐めよ。三次
輔祭 又衆兄弟及び衆「ハリスティアニン」の為に祈る。 (詠) 主憐めよ 三次
司祭 蓋爾は仁慈にして人を愛する神なり、我等爾父と子と聖神に光榮を帰す、今も何時も世世に。
(詠) 「アミン」神父よ、主の名を以て祝讚せよ。
司祭 光榮は一性にして生命を施す分れざる聖三者に帰す、今も何時も世世に。(詠) 「アミン」

【六段の聖詠】

至高きには光榮神に帰し、地には平安降り、人には恵臨めり。三次
主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす。二次

【第3 聖詠】 主よ、我が敵は何ぞ多き、多くの者は我を攻む、多くの者は、我が靈を指して彼は神より救を得ずと云ふ、然れども主よ、爾は我を衛る盾なり、我の榮なり。爾は我が首を挙ぐ、我が声を以て主に呼ぶに、主は其の聖山より、我に聴き給う。我臥し眠り、又覺む、蓋主は我を扞ぎ衛ればなり。環りて我を攻むるの萬民は我懼るるなし。主や起てよ、吾が神や、我を救ひ給え。爾は我が諸敵の頬を打ち、悪人の齒を折けり。救は主に依る。爾の降福は爾の民に在り。

我臥し、寝ね、又覺む、主は我を扞ぎ衛ればなり。

【第37 聖詠】 主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ、蓋爾の矢は我に刺さり、爾の手は重く我に加わる。爾の怒に依りて我が肉に傷まざる所なく、我の罪に因りて我が骨は安きを得ず、蓋我が不法は我が首に溢れ、重任の如く我を壓す、我の無智に依り我が傷腐れて且臭し。我屈まりて仆れんとし、終日憂ひて行く、蓋我が腰は熱に悩まされ、我が肉に傷まざる所なし。我力衰えて痛く憊れ、我が心の裂くるによりて號ぶ。主よ、我が悉くの願は爾の前に在り、我が歎息は爾に隠るるなし。我が心は戦ひ栗き、我が力は我より脱け、我が目の光も已に我にあるなし。我が朋と親しき者とは我が傷を見て離れ、我が親戚は遠ざかりて立つ。我が生命を覓むる者は網を設け、我を害わんと欲する者は我が滅亡のことを言ひて、毎日悪しき謀を圖む、然れども我は聾の如く聴かず、啞の如く己の口を啓かず、是に於て我は聞かなく、其口に答ふる所なき人の如くなれり、蓋主よ、我爾を恃む、主我が神よ、爾に聴き給はん。我言えり、願はくは敵は我に勝たざらん、我が足の跌く時、彼等は我に向ひて誇り高ぶる。我殆ど仆れんとす、我の憂は常に我が前に在り。我は我が不法を認め、我が罪の為に甚哀しむ。我が敵は生きて愈強く、故なくして我を疾むる者は益多し、悪を以て我の善に報ゆる者は、我が善に従ふに因りて我の敵となれり。主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我の救主よ、速に來たりて我を救ひ給へ。

【第62 聖詠】 神よ、爾は我の神なり。我暁より爾に尋ぬ、我が靈は渴きて爾を望み、我が身は空しくして燥ける水なき地にありて、痛く爾を慕ふ、爾の能力と爾の光榮とを見ん為なり、我が嘗て爾を聖所に觀しが如し、蓋爾の愛憐は生命に愈る。我が口爾を讚美せん。是くの如く我生ける時爾を崇め讚め、爾の名に依りて我が手を挙げん。我が靈の飽かざること脂油を以てするが如く、我が口飲の聲にて爾を讚美す、榻にて爾を記憶し、夜更に爾を思ふ時に在り。蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が靈は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。彼の我が靈を害はんことを謀る者は地の深き處に降らん、彼等刃に櫻りて、狐の獲物とならん。惟王は神の為に楽しまん、凡そ彼を以て誓う者は譽を得ん、蓋謊を言う者の口は塞がれんとす。

夜更に爾を思ふ、蓋爾は私の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が霊は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光栄は爾に帰す。三次
主憐めよ。三次

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

(司祭至聖所より出で、王門の前に立ちて早課祝文を黙誦。)

【第 87 聖詠】 主我が救の神よ、我昼夜爾の前に呼ぶ、願はくは我が祈は爾が顔の前に至らん、爾の耳を我が願に傾けよ、蓋我が霊は苦難に飽き、我が生命は地獄に近づけり。我は墓に入る者と等しくなり、力なき人の如くなれり、死人の中に投げられて、猶殺されて柩に臥し、爾に復記憶せられず、爾の手より絶たれし者の如し。爾我を深き坎に、闇冥に、淵に置けり。爾の憤は重く我に加はり、爾の波を傾けて我を撃てり。爾我が識る所の者を我より遠ざけ、我を彼等の悪むべき者となせり、我閉されて出ざるを得ず。我が目は愁苦に因りて痛く疲れたり、主よ、我終日爾を呼び、手を伸べて爾に向へり。爾豈死せし者に奇跡を施さんや、死せし者豈起ちて爾を讃揚せんや、爾の憐は墓の中に、爾の眞は腐敗の地に、豈伝へられんや、爾の奇跡は闇冥に、爾の義は遺忘の地に、豈識られんや。主よ、我爾に呼ぶ、私の祈は晨に爾の前に在り。主よ、爾は何為れぞ我が霊を棄て、爾の顔を我に隠し給ふ。我少きより禍に遭い、幾ど消え亡せんとし、爾の恐嚇を受けて我が疲は極れり。爾の憤は我を度り、爾の恐嚇は我を碎けり、毎日水の如くに我を環り、齊しく集りて我を圍む。爾は我が友と親しき者とを我より遠ざけたり、我が識る所の者は見えず。

主我が救の神よ、我昼夜爾の前に呼ぶ。

願はくは我が祈は爾が顔の前に至らん、爾の耳を我が願に傾けよ。

【第 102 聖詠】 我が霊よ、主を讃め揚げよ、我が中心よ、其聖なる名を讃め揚げよ。我が霊よ、主を讃め揚げよ、彼が悉くの恩を忘るる母れ。彼は爾が諸の不法を赦し、爾が諸の疾を療す、爾の生命を墓より救ひ、憐と恵とを爾に冠らせ、幸福を爾の望に飽かしむ、爾が若復さること驚の如し。主は凡そ迫害せらるる者の為に義と審判とを行ふ。彼は己の途をモイセイに示し、己の作為をイスライリの諸子に示せり。主は宏慈にして矜恤、寛忍にして鴻恩なり、怒りて終あり、憤を永く懷かず。我が不法に因りて我等に行はず、我が罪に因りて我等に報いず、蓋天の地より高きが如く、斯く主を畏るる者に於ける其憐は大なり、東の西より遠きが如く、斯く主は我が不法を我等より遠ざけたり、父の其子を憐むが如く、斯く主は彼を畏るる者を憐む。蓋彼は我が何より造られしを知り、我等の塵なるを記念す。人の日は草の如く、其栄ゆること田の華の如し。風之を過ぐれば無に帰し、其有りし處も亦之を識らず。唯主の憐は彼を畏るる者に世より世に至り、彼の義は其約を守り、其誠を懐ひて、之を行ふ子孫孫に及ばん。主は其宝座を天に建て、其国は萬物を統べ治む。主の諸の天使、能力を具へ、其声に遵ひて其言を行ふ者よ、主を讃め揚げよ。主の悉くの軍、其旨を行ふ役者よ、主を讃め揚げよ。主の悉くの造工よ、其一切治むる處に於て主を讃め揚げよ。我が霊よ、主を讃め揚げよ。

其一切治むる處に於て、我が霊よ、主を讃め揚げよ。

【第 142 聖詠】 主よ、我が祈を聆き、爾の眞実に依りて我が願に耳を傾けよ、爾の義に依りて我に聴

き給へ。爾の僕と訟を為す母れ、蓋凡そ生命ある者は、一も爾の前に義とせられざらん。敵は我が靈を逐ひ、我が生命を地に蹂り、我を久しく死せし者の如く暗に居らしむ、我が靈は私の衷に悶え、我が心は私の衷に曠しきが如し。我古の日を想ひ、凡そ爾の行ひしことを考へ、爾が手の工作を計る。我が手を伸べて爾に向ひ、我が靈は渴ける地の如く爾を慕ふ。主よ、速に我に聴き給へ、我が靈は衰へたり、爾の顔を我に隠す母れ、然からずば我は墓に入る者の如くならん。我に夙に爾の憐を聴かしめ給へ、我爾を頼めばなり。主よ、我に行くべき途を示し給へ、我が靈を爾に挙げればなり。主よ、我を我が敵より救ひ給へ、我爾に趨り附く。我に爾の旨を行ふを教へ給へ、爾は私の神なればなり、願はくは爾の善なる神は我を義の地に導かん。主よ、爾の名に依りて我を生かし給へ、爾の義に依りて我が靈を苦難より引き出し給へ、爾の憐を以て我が敵を滅し、凡そ我が靈を攻むる者を夷げ給へ、我は爾の僕なればなり。

主よ、爾の義に依りて我に聴き給へ、爾の僕と訟を為す母れ。

主よ、爾の義に依りて我に聴き給へ、爾の僕と訟を為す母れ。

願はくは爾の善なる神は我を義の地に導かん。

光荣は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、アミン

ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya」、神よ、光荣は爾に帰す。三次

【大聯禱】

輔祭 我等安和にして主に禱らん、(詠) 主憐めよ
輔祭 上より降る安和と我等が靈の救の為に主に禱らん、
輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教会の堅立、及び衆人の合一の為に主に禱らん、
輔祭 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の為に主に禱らん、
輔祭 教会を司る我等の(府)主教()、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職悉くの教衆、及び衆人の為に主に禱らん、
輔祭 我が国の天皇、及び国を司る者の為に主に禱らん、
輔祭 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の為に主に禱らん、
輔祭 気候順和、五穀豊穰、天下泰平の為に主に禱らん、
輔祭 航海する者、旅行する者、病を患ふる者、艱難に遭ふ者、虜となりし者、及び彼等の救の為に主に禱らん、
輔祭 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが為に主に禱らん、
輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救ひ憐み護れよ、
輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光荣の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主爾に

司祭 蓋凡そ光荣尊貴伏拜は爾父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世世に、**(詠) 「アミン」**

【ア ril l i ya】 (8調で兩詠隊交互に「ア ril l i ya」を歌ふ、)

ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya

(第一句) 神よ我が神^oは夜中より爾を慕う、蓋爾の誠めは地に在りて光なり、※

(第二句) 地に居る者は義を学べ。

(第三句) 爾の民を憎むものは辱めを承けん。

(第四句) 主よ、彼らに艱難を加へ、地の驕れる者に艱難を加へよ。

毎句の後「ア ril イヤ」を歌う。



[讃詞]

光明の門徒が晚餐の濯に照されし時、悪心のイウダは貪の疾に味まされて、爾義なる審判者を不法の審判者に売り付す。財に耽る者よ、此が為に縊れし者を観よ、あき足らぬ霊、夫子に斯ることを為すを恐れざりし者を避けよ。衆人を慈む、主よ、光栄は爾に帰す。(三次)*「受難週略」では2回



[小聯禱]

輔祭 我等復又安和にして主に祷らん。

(詠) 主憐めよ

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。

輔祭 至聖至潔にして讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

(詠) 主爾に

司祭 蓋権柄及び国と権能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」

(衆各其手に執る所の蠟燭に火を點ず、福音經を読む毎に)

輔祭 我等に聖福音經を聴くを賜ふを主神に禱らん。

(詠) 主憐めよ。三次

輔祭 睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし。

司祭 衆人に平安。

(詠) 爾の神にも

司祭 イオアンに因る聖福音經の読み。

(詠) 主よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

主よ、光榮はなんじに歸す、光榮は爾に歸す

輔祭 謹みて聴くべし。

聖受難の第一福音經 13章31節至十八章一節

主は其門徒に謂へり、今人の子は榮せられたり、神も亦彼の中に榮せられたり。若し神は彼の中に榮せられしならば、神も亦彼を己の中に榮せん、且速に彼を榮せん。小子よ、我尚暫時爾等と偕にす、爾等我を尋ねん、而して我が曾てイウデヤ人に、我の往く所には爾等来る能はずと、云ひし如く、今爾等にも亦云ふなり。我新なる誠を爾等に與ふ、即爾等相愛すべし、我が爾等を愛するが如く、爾等も是くの如く相愛すべし。爾等若し相愛せば、人皆此に由りて、爾等の我が門徒たるを知らん。シモンペトル彼に謂ふ、主よ爾何にか往く。イイスス之に答へて曰へり、我の往く所には、爾今我に従ふ能はず、然れども後我に従はん。ペトル彼に謂ふ、主よ、我胡為れぞ今爾に従ふ能はざる、我爾の為に我が生命を捐てん。イイスス之に答へて曰へり、爾の生命を我が為に捐てんか、我誠に誠に爾に語ぐ、鶏の鳴かざる前に、爾三次我を諱まん。爾等の心擾るる母れ、神を信じ、亦我を信ぜよ。我が父の家に第宅多し。然らずば、我爾等に言ひしならん、我往きて爾等の為に所を備へん。往きて、爾等の為に所を備へば、復来りて、爾等を接けて、我に就かしめん、我が居る所に爾等も居らん為なり。我が何處に往くを、爾等知り、其道をも知る。フォマ彼に謂ふ、主よ、我等は爾の何處に往くを知らず、焉ぞ其道を知るを得ん。イイスス之に謂ふ、我は道なり、真実なり、生命なり、人若し我に由らずば、父に来るなし。爾等若し我を識らば、我が父をも識らん、今より爾等彼を識り、且彼を見たり。フィリップ彼に謂ふ、主よ、我等に父を示せ、然らば我等に足る。イイスス之に謂ふ、フィリップよ、我斯く久しく爾等と偕にするに、爾未だ我を識らざるか。我を見し者は、父を見しなり、如何ぞ爾我等に父を示せと云ふ。我の父に居り、父の我に居ることを爾信ぜざるか。我が爾等に言ふ所の言は、己に由りて言ふに非ず、我に居る父は、彼事を行ふなり。爾等、我が父に居り、父も我に居ると云ふを、我に信ぜよ、然らずば、其事に縁りて我に信ぜよ。我誠に誠に爾等に語ぐ、我を信ずる者は、我が行ふ所の事を、彼も亦行はん、且此より大なる者を行はん、蓋我は我が父に往く。爾等凡そ我が名に因りて求めん者は、我之を行はん、父が子の中に榮せられん為なり。爾等の我が名に因りて求めん者は、我行はん。爾等若し我を愛せば、我が誠を

守れ。我父に求めん、彼は別に撫恤者を爾等に與へて、世世に爾等と偕に居らしめん、即真実の神にして、世は彼を接くる能はず、其彼を見ず、又彼を識らざる故なり、爾等は彼を識る、蓋彼は爾等と偕に居り、且爾等の衷に在らん。我爾等を捨てて孤子とせず、我爾等に來らん。尚頃して、世は復我を見ず、然れども爾等我を見ん、蓋我は生く、爾等も亦生きん。其日に爾等は、我の我が父に居り、爾等の我に居り、我も爾等に居るを知らん。我が誠を有ちて、之を守る者は、是れ即我を愛する者なり、我を愛する者は、我が父に愛せられん、我も彼を愛し、且己を彼に顕さん。イウダ、「イスカリオト」ならざる者、彼に謂ふ、主よ、胡為れぞ爾は己を我等に顕さんと欲して、世には然せざる。イイスス之に答へて曰へり、人若し我を愛せば、我が言を守らん、我が父も彼を愛せん、且我等彼に來りて、彼に住居を為さん。我を愛せざる者は、我が言を守らず、爾等が聞く所の言は、我が言に非ず、乃我を遣しし父の言なり。我爾等と偕に在りて、此を爾等に言へり。撫恤者、即聖神、父が我の名に縁りて遣さんとする者は、彼凡の事を爾等に教へ、且我が爾等に言ひし事を、皆爾等に記念せしめん。我平安を爾等に遣す、我が平安を爾等に與ふ、我が爾等に與ふるは、世の與ふるが如きに非ず、爾等の心擾るる毋れ、又懼るる毋れ。我往きて、復爾等に來らんと、我が言ひしことは、爾等之を聞けり。爾等若し我を愛せば、我父に往くと云ひしに縁りて喜ばん、蓋我が父は我より大なり。我今事の未だ成らざる先に、爾等に言へり、其成らん時に、爾等の信ぜん為なり。我既に爾等と語らんこと多からず、蓋此の世の君は來る、彼は我の中に有つ所なし。然れども世の我が父を愛し、父が我に命ぜし如く行ふを知らん為に、起ちて此より往かん。我は真の葡萄の樹、我が父は園師なり。凡そ我に在りて実を結ばざる枝は、彼之を去り、凡そ実を結ぶ者は、之を潔む、我益々繁く実を結ばん為なり。爾等既に我が爾等に語りし言に由りて潔められたり。爾等我に居れ、我も爾等に居らん。枝若し葡萄の樹に居らずば、自ら実を結ぶ能はず、爾等も若し我に居らずば、亦是くの如し。我は葡萄の樹、爾等は枝なり、我に居り、我も彼に居る所の者は、斯の者多くの実を結ぶ、蓋爾等我無くしては、何事をも行ふ能はず。人若し我に居らずば、枝の如く外に棄てられて枯る、此くの如き枝を集めて、火に投ず、此れ乃焚く。爾等若し我に居り、我が言爾等に居らば、凡そ望む所を求めよ、然らば爾等に成らん。爾等若し多くの実を結ばば、我が父は此に由りて榮せられん、爾等乃我が門徒と為らん。父の我を愛するが如く、我も爾等を愛す、爾等我が愛に居れ。爾等若し我が誠を守らば、我が愛に居らん、我も我が父の誠を守りて、其愛に居るが如し。我が此を爾等に語りしは、我が喜の爾等に居り、爾等の喜の全からん為なり。我が爾等を愛するが如く、爾等相愛すべし、此れ我の誠なり。人其友の為に生命を捐つるは、愛此より大なるはなし。爾等若し我が爾等に誠むる事を行はば、即我が友たり。我既に爾等を僕と曰はず、蓋僕は其主の行ふ所を知らず、乃爾等を友と曰へり、凡そ我が父より聞きし所を爾等に告げしに縁る。爾等我を選びしに非ず、我は爾等を選び、爾等を立てたり、爾等が往きて、実を結び、且爾等の実の存せん為、爾等が凡そ我が名に因りて父に求むる所は、彼爾等に與へん為なり。我此を爾等に誠む、爾等相愛すべし。世若し爾等を惡まば、爾等に先だちて我を惡めりと知れ。爾等若し世に属せば、世は己に属する者を愛せん、然れども爾等は世に属せず、乃我は爾等を世より選べり、此に由りて世は爾等を惡む。我が嘗て爾等に、僕は其主より大ならずと云ひし言を憶へ。人若し我を窘逐せば、爾等をも窘逐せん。若し我が言を守らば、爾等の言をも守らん。然れども是皆我の名に因りて爾等に行はん、我を遣しし者を識らざる故なり。我若し來りて、彼等に言はざりしならば、彼等罪なからん、然れども今は其罪を辭するを得ず。我を惡む者は我が父をも惡む。我若し彼等の中に、他の者の未だ為

さざりし事を行はざりしならば、彼等罪なからん、然れども今彼等は我及び我が父を已に見、且悪めり。是くの如く彼等の律法に、故なくして我を悪めりと、録せる言應へり。我が父より爾等に遣さんとする撫恤者、真実の神、父より出づる者は来らん時、彼我の事を證せん。爾等も亦證せん、始より我と偕に在るに因りてなり。我が此を爾等に語りしは、爾等の躓かざらん為なり。人爾等を会堂より逐はん、且凡そ爾等を殺す者は、此を以て神に奉事すと意ふ時至らん。此等の事を行はんとするは、父と我とを識らざるに因りてなり。然れども我が此を爾等に語りしは、爾等が、時の至るに及びて、我が此を爾等に言ひしを憶ひ起さん為なり、初より此を爾等に言はざりしは、爾等と偕に在りし故なり。今我を遣しし者に往く、而して爾等の中我に、何に往くと、問ふ者なし。惟我が此を爾等に語りしに因りて、憂は爾等の心に盈てり。然れども我真を爾等に語ぐ、我が往くは爾等の為に益あり、蓋若し我往かずば、撫恤者爾等に来らざらん、我往かば、彼を爾等に遣さん。彼来りて罪に於て、義に於て、審判に於て、世を責めん。罪に於ては、其我を信ぜざるに因りてなり、義に於ては、我は我が父に往き、爾等復我を見ざらんとするに因りてなり、審判に於ては、此の世の君の審判せられしに因りてなり。我尚多く爾等に言ふべき事あれども、爾等今容るる能はず。然れども彼、即真実の神、来らん時、爾等を凡の真実に導かん、蓋彼は已に由りて言はんとするに非ず、乃聞かんとする事を言はん、且将来の事を爾等に示さん。彼は我を榮せん、蓋我に属する者より取りて、爾等に示さん。凡そ父の有つ所の者は我に属す、故に我、彼は我に属する者より取りて、爾等に示さんと曰へり。頃して爾等我を見ざらん、復頃して我を見ん、蓋我父に往く。是に於て其門徒の或者相語りて曰へり、彼が我等に、頃して我を見ざらん、復頃して我を見ん、且我父に往くと云ふは、是れ何ぞや。故に曰へり、彼が頃と云ふは、此れ何事ぞや、我等其言ふ所を知らず。イイススは其己に問はんと欲するを知りて、彼等に謂へり、我が、頃して我を見ざらん、復頃して我を見んと、云ひしを爾等相尋ぬるか。我誠に誠に爾等に語ぐ、爾等は哭き哀しまん、世は喜ばん、爾等は憂へん、然れども爾等の憂は變じて喜とならん。婦は産むに及びて、憂を懐く、其期至りたればなり、然れども子を生みし後は、喜に因りて復苦しみを憶はず、人世に生れたればなり。是くの如く爾等も今憂を懐く、然れども我復爾等を見ん、而して爾等の心は喜ばん、且其喜を爾等より奪ふ者なし。其日に於て爾等我に問ふ所なからん。我誠に誠に爾等に語ぐ、凡そ我が名に因りて父に求むる所は、彼爾等に與へん。今に至るまで爾等我が名に因りて求むる所なかりき、求めよ然らば得ん、爾等の喜の全からん為なり。我譬を以て此等の事を爾等に語れり、然れども復譬を以て爾等に語らず、乃明に父の事を爾等に示す時至らん。其日に於て爾等我が名に因りて求めん、而して我爾等の為に父に願はんと曰はず、蓋父親から爾等を愛す、爾等が我を愛し、且我が神より出でしことを信ぜしに因りてなり。我は父より出でて、世に来れり、復世を離れて、父に往く。其門徒彼に謂ふ、視よ、今爾は明に語りて、一も譬を言はず。今我等は、爾が知らざる所なく、且人の爾に問ふを待たざるを知る、此に縁りて我等は爾が神より出でたるを信ず。イイスス彼等に答へて曰へり、今信ずるか、視よ、時は至る、今已に至れり、爾等各其所に散じて、我を獨遣さん、然れども我獨に非ず、蓋父我と偕に在るなり。我が此を爾等に語りしは、爾等が我に在りて平安を有たん為なり。世に在りて爾等患難を受けん、然れども勇めよ、我は世に勝てり。イイスス此を言ひ竟りて、其目を天に挙げて曰へり、父よ、時至れり、爾の子を榮せよ、爾の子も爾を榮せん為なり、蓋爾は彼に凡の肉体の上の権を與へたり、彼が凡そ爾の彼に與へし者に永遠の生命を與へん為なり。永遠の生命とは、即爾、唯一の真の神、及び爾が遣ししイイススハリストスを知ること是なり。我已に

爾を地に榮し、爾が我に與へて行はしむる事を成せり。今爾父よ、我をして爾に在りて榮を享けしめよ、即創世の先に我が爾に在りて有ちたる榮なり。爾が世の中より我に與へし人人に、我爾の名を顕せり、彼等は爾に属し、爾彼等を我に與へたり、彼等爾の言を守れり。今彼等は凡そ爾が我に與へし者、皆爾よりするを知れり。蓋我は爾が我に與へし言を彼等に與へたり、彼等之を受け、且我が爾より出でしを誠に知り、又爾が我を遣ししを信ぜり。我は彼等の為に祈る、世の為に祈らず、乃爾が我に與へし者の為なり、蓋彼等は爾に属す。凡そ我に属する者は爾に属し、爾に属する者は我に属す、我は彼等の中に榮せられたり。我は是より世に在らず、彼等は世に在り、我爾に往く、聖なる父よ、爾が我に與へし者は、爾の名に因りて之を守りて、彼等を我等の如く一と為らしめよ。我彼等と偕に世に在りし時、爾の名に因りて彼等を守れり、爾が我に與へし者は、我之を守り、其中一も亡びず、惟沈淪の子は亡びたり、聖書の應ふを致す。今我爾に往く、我世に在りて之を言ふ、彼等が己の中に我の全き喜を有たん為なり。我爾の言を彼等に與へたり、而して世は彼等を悪めり、蓋彼等は世に属せず、我の世に属せざるが如し。我が祈るは、爾が彼等を世より取らん為に非ず、乃彼等を悪より護らん為なり。彼等は世に属せず、我の世に属せざるが如し。爾の眞実を以て彼等を聖にせよ、爾の言は眞実なり。爾が我を世に遣しし如く、我も彼等を世に遣せり。我彼等の為に己を聖にす、彼等も眞実を以て聖にせられん為なり。我惟彼等の為にのみ祈るに非ず、乃亦彼等の言に縁りて我を信ずる者の為なり、願はくは皆一と為らん、父よ、爾が我に在り、我も爾に在るが如く、願はくは彼等も我等に在りて一と為らん、世が爾の我を遣ししを信ぜん為なり。亦爾が我に與へし榮を、我彼等に與へたり、我等の一なるが如く、彼等の一と為らん為なり。我は彼等に在り、爾は我に在り、彼等をして一に成全せしめん為、且世が爾の我を遣し、又我を愛する如く、彼等を愛することを知らん為なり。父よ、我は爾が我に與へし者の、我が居る所に我と偕に居らんことを望む、彼等が我の榮を見ん為なり、即爾が我に與へし榮なり、蓋爾は創世の先より我を愛せり。義なる父よ、世は爾を識らず、然れども我は爾を識れり、彼等も爾が我を遣ししを識れり、我爾の名を彼等に示せり、復之を示さん、爾が我を愛する愛は彼等に在り、我も彼等に在らん為なり。イイスス此を言ひて後、其門徒と偕にケドロン河の外に出でたり、彼處に園あり、彼及び彼の門徒は其中に入れり。

(詠) 主よ、光榮は爾の寛忍に歸す。



[第一倡和詞] (毎讃詞二次)

<第8調> 民の諸侯相集まりて主を攻め、其ハリストスを攻む。



<第8調> 相謀りて我を害せんと欲す。主よ、主よ、我を遣つる母れ。



我等潔き感覺をハリストスに献げ、／其友として我等の靈を彼の為に祭に献ぜん。／イウダの如く世俗の慮に惑はさるるなくして、／我等の内室によばん、／天に在す我等の父よ、／我等を兇惡より救ひ給へ。

光栄、今も（受難週略による。三歌齋経では、光栄、生神女讃詞、今も、繰り返す）

（生神女讃詞）婚配を知らざる者よ、／爾は童貞女として生み、／聘女ならぬ母よ、／爾は童貞女として止まれり。／生神女マリヤよ、／ハリストス我が神に我等が救はれんことを祈り給へ。

〔第二倡和詞〕

<第6調>イウダは不法なる学士等に趨（はし）りて曰へり、爾等我に幾何（いくばく）を與へんと欲するか、我彼を爾等に付（わた）さん。時に相議する者の間に爾議せらるる者は親ら見えずして立てり。心を知る者よ、我等の靈を宥（なだ）め給へ。

我等矜憐（あわれみ）を以て神に役めん、マリヤの晚餐に於けるが如し、イウダの如くに貪（むさぼり）を獲べからず、常にハリストス神と偕に在らん為なり。

光栄、今も（受難週略による。三歌齋経では、光栄、生神女讃詞、今も、繰り返す）

（生神女讃詞）童貞女よ、爾が言ひ難く生みし者に、其人を慈む主なるに因りて息めずして祈り給へ、彼が爾に趨り附く衆人を危難より救はん為なり。

〔第三倡和詞〕

<第6調>人を愛する主よ、ラザリの復活に因りて、エウレイの諸子は爾に「オサンナ」をよべり。惟不法のイウダは悟ることを欲せざりき。

ハリストス神よ、爾は晚餐の時爾の門徒に預言せり、爾等の中の一人は我を売らん。惟不法のイウダは悟ることを欲せざりき。

イオアンが、主よ、爾を売る者は誰ぞと問ひしに、爾は餅（ぱん）を以て之を示し給へり。惟不法のイウダは悟ることを欲せざりき。

主よ、イウデヤ人は／銀三十及び偽の接吻を以て／爾を殺さんと謀れり。惟不法のイウダは悟ることを欲せざりき。

ハリストス神よ、爾は己の門徒の足を濯ふ時之に命じて曰へり、爾等が見る所の如く斯く行へ。惟不法のイウダは悟ることを欲せざりき。

ハリストス我等の神よ、爾は己の門徒に謂へり、儆醒（けいせい）せよ、祈祷せよ、誘惑に入らざらん為なり。惟不法のイウダは悟ることを欲せざりき。

光栄、今も（受難週略による。三歌齋経では、光栄、生神女讃詞、今も、繰り返す）

（生神女讃詞）生神童貞女よ、爾の諸僕を災難より救ひ給へ、我等皆爾を破られぬ墻及び轉達として、神の次に爾に趨り附けばなり。

[小聯禱]

輔祭 我等復又安和にして主に祷らん。 (詠) 主憐めよ
 輔祭 神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。 (詠) 主憐めよ
 輔祭 至聖至潔にして讚美たる我等の光荣の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。
 (詠) 主爾に
 司祭 蓋権柄及び国と権能と光荣は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に。
 (詠) 「アミン」

[坐誦讚詞]

<第7調> 爾は晚餐の時に門徒を養ひ、且売付(うりわたし)の定まりたるを知りて、之を為す者のイウダなるを示せり。爾其悛まらざるを知りたれども、衆の爾が世界を仇より救はん為に甘じて己を付すを知らんことを望み給へり。恒忍なる主よ、光荣は爾に帰す。

(三歌斎経では光荣、今も、同上繰り返す)

(此くの如き坐誦讚詞には我等坐せず、乃起ちて此を歌ふ、蓋其時司祭は至聖所に炉儀を行ふ。)

なんじは ^{ばんさん}晚餐のときに 門徒をやしない 且つ売りわたしの
 定まりたるを 知りて これを為す イウダなるを示せり
 なんじその 改まらざるを知りたれども 衆の爾が世界を仇より
 救わんために 甘んじて 己をわたすを 知らんことを
 望みたまえり 恒忍の主よ、光荣は 爾に 帰す

輔祭 我等に聖福音経を聴くを賜ふを主神に祷らん。 (詠) 主憐めよ。三次
 輔祭 睿智、肅みて立て、聖福音経を聴くべし。
 司祭 衆人に平安。 (詠) 爾の神にも。
 司祭 イオアンに因る聖福音経の読み。
 (詠) 主よ、光荣は爾に帰す、光荣は爾に帰す。



主よ、光 栄は なんじに 帰す、光 栄は 爾に 帰す

輔祭 謹みて聴くべし。

聖受難の第二福音経 18章 1-28

彼の時イイスス其門徒と偕にケドロン河の外に出でたり、彼處に園あり、彼及び彼の門徒は其中に入れり。彼を売るイウダも此の處を識れり、蓋イイスス屢（しばしば）其門徒と偕に彼處に集りたり。故にイウダは兵卒一隊を、及び司祭諸長とファリセイ等より下吏を受けて、炬と燈と兵器とを以て、此の處に来れり。イイススは凡そ己に及ぼんとする事を知りて、出でて彼等に謂へり、爾等誰を尋ぬるか。彼に答へて曰へり、イイススナゾレイなり。イイスス彼等に謂ふ、我は是なり。彼を売るイウダも彼等と偕に立てり。イイススが我は是なりと言ひし時、彼等後へ退きて、地にたおれたり。復彼等に問へり、爾等誰を尋ぬるか。彼等曰へり、イイススナゾレイなり。イイスス答へて曰へり、我爾等に我は是なりと謂へり、故に若し我を尋ぬるならば、此の輩を容して去らしめよ、彼が言ひし言に應ふを致す、云く、爾が我に與へし者の中、我一人をも亡さざりきと。時にシモンペトル劔ありて、之を抜き、司祭長の僕を撃ちて、其右の耳を削げり。僕の名はマルホなり。イイススペトルに謂へり、爾の劔を鞘に韜めよ、父の我に與へし爵は、我豈之を飲まざらんや。是に於て兵卒と千夫長とイウデヤの下吏とイイススを執へて、之を縛り、先づ之をアンナに曳き至れり、蓋彼は是の歳司祭長たるカイアフアの岳父なり。カイアフアは、即イウデヤ人に議りて、一人民の為に死するは益ありと、云ひし人なり。シモンペトル及び他の一人の門徒イイススに従へり、此の門徒は司祭長の識る所の者にして、イイススと偕に司祭長の中庭に入り、ペトルは門の外に立てり。後司祭長の識る所の門徒は出でて、門を守る女に言ひて、ペトルを内に入れたり。是に於て、門を守る婢ペトルに謂ふ、爾も此の人の門徒の一に非ずや。彼曰く、然らず。時に諸僕及び下吏等寒きに因りて火を焚き、彼に立ちて、煖まり、ペトルも亦彼等と偕に立ちて煖まれり。司祭長はイイススに其門徒及び其教の事を問へり。イイスス彼に答へて曰へり、我明に世に語れり、我常に会堂及び殿、即イウデヤ人の恒に集る所に於て、教を宣べて、隱に語りしことなし。何ぞ我に問ふ、聴きし者に我が彼等に何を語りしを問へ、視よ、此の輩は我が言ひし事を知る。彼が此を言ひし時、旁に立てる下吏の一人イイススの頬を批ちて曰へり、爾は司祭長に斯く對ふるか。イイスス彼に答へて曰へり、若し我が言ひし事悪くば、其悪しき事を證せよ、若し善くば、何ぞ我を批つ。アンナは彼を縛りたるまま司祭長カイアフアに送れり。時にシモンペトル立ちて煖まれり。或彼に謂へり、爾も其門徒の一に非ずや。彼諱みて曰へり、然らず。司祭長の僕の一人、ペトルが耳を削ぎたる者の親戚、曰く、我爾が彼と偕に園に在るを見しに非ずや。ペトル復諱みたり、忽鶏鳴けり。彼等イイススを曳きて、カイアフアより公廨に至れり。時已に平坦なり、彼等は公廨に入らざりき、汚されざらん為、即逾越節筵を食するを得ん為なり。

(詠) 主よ、光 栄は爾の 寛 忍 に 帰す。



主よ、光 栄は爾の 寛 忍 に 帰す

〔第四倡和詞〕

<第5調>今日イウダは夫子を遺てて、悪魔を受く、貪婪（むさぼり）の慾に盲（めしい）にせられ、眩まされて光を失ふ、蓋光体を銀三十に売りたる者は何如にして見るを得ん。然れども世界の為に、苦を受けし者は我等に輝けり。我等彼によばん、人を愛するに因りて苦しみを忍びし主よ、光栄は爾に帰す。

今日イウダは 夫子を遺^すてて悪魔を受く むさぼりの慾に
 盲^{めしい}にせられ、眩^{くら}まされて光を失な^う 蓋、光体を
 銀三十に 売りたるものは 如何^{いか}にして 見るを得^ん
 然れども世界の為に苦しみを受けしものは 我等に輝けり
 我等彼に呼ば^ん 人を愛するに よりて
 苦しみを忍びし主よ、光栄はなんじに 帰^す

<第5調>今日イウダは敬虔の為をなして、恩賜を失ひ、門徒にして売る者と為り、尋常の接吻の中に詭詐を藏し、無知にして、主宰の愛よりも銀三十を貴びて、不法の会の引導と為れり。然れども我等はハリストスを救と有ちて、之を讃栄せん。

<第8調>我等はハリストスに於ける兄弟たるに因りて、我等の隣に無慈悲ならずして、兄弟を愛する愛を獲べし、無慈悲の僕^の如く、銀の故に因りて定罪せられざらん為、イウダの如く、悔みて一も益を獲ざることなからん為なり。

光栄、今も

（生神女讃詞）至りて讃美たる者、婚姻に與らざる生神女マリヤよ、爾に關して到る處に至栄なる事は唱へられたり、爾身にて萬有の造成主を生みたればなり。

〔第五倡和詞〕

<第6調>門徒は夫子の價を共議し、銀三十にて主を売り、偽の接吻を以て彼を不法の者に死の為に付せり。

今日天地の造成主は其門徒に謂へり、時届り、我を売るイウダは近づけり。我が十字架に二の盜

賊の間に在るを見て、孰も我を諱むべからず、蓋我は人として苦しみ、人を愛する者として我を信ずる者を救はん。

光荣、今も

(生神女讃詞) 季(すえ)の世に言ひ難く孕(はら)みて、爾の造成主を生みし者よ、彼に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

[第六倡和詞]

<第7調>今日イウダは眠らずして、世世の前より定まりたる世界の救主、五の餅を以て大衆を飽かしめし者を売り付す。今日不法の者は夫子を諱み、門徒たりし者は主宰を付し、「マンナ」を以て人を飽かしめし者を銀の為に売る。

今日イウデヤ人は杖を以て海を截り分ちて、彼等を野に導きし主を十字架に釘せり。今日彼等の為にエギプト人を罰せし者の脅を戈にて刺せり、彼等に糧として「マンナ」を雨らしし者に膽を飲ませたり。

主よ、爾は自由の苦に來りて、己の門徒によべり、爾等若し一時も我と偕に徹醒する能はざりしならば、何如にして我の為に死なんことを約したる、イウダを觀よ、彼は何如に眠らずして我を不法者に付さんことを務むる。起きよ、祈禱せよ、孰も我を十字架の上に見て、我を諱まざらん為なり。恒忍なる主よ、光荣は爾に歸す。

光荣、今も

(生神女讃詞) 諸天に容れられざる者を爾の腹に容れし生神女よ、慶べ。諸預言者の伝へし所、エムヌイルが因りて我等に輝きし所の童貞女よ、慶べ、ハリストス神の母よ、慶べ。

[小聯禱]

我等復又安和にして云云

高聲 蓋爾父と子と聖神の至尊至嚴の名は讃揚讃榮せられたり、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」

[坐誦讃詞]

<第7調>イウダよ、何の所以か爾を救世主を売る者と為したる、豈彼は爾を使徒の会より離ししか、豈に疾を醫す恩賜を奪ひしか、豈彼等と晚餐して、爾を筵より退けしか、豈他の者の足を濯ひて、爾の足を顧みざりしか、嗚乎爾は幾許かの幸福を忘れし者なり。故に爾が恩を知らざる質は表され、彼の量り難き恒忍及び大なる憐は伝へらる。(三歌齋經では光荣、今も、同上繰り返す)

イウダよ 何の所以か、爾を救世主を売る者と為したる
 豈に彼は爾を使徒の会より離ししか 豈に 疾をいやす
 恩賜を奪いしか 豈に彼らと晚餐して爾を宴より退けしか
 豈に 他の者の足を濯いで、爾の足を顧みざりしか
 嗚呼 爾は幾ばくかの幸福を忘れし者なり ゆえに
 爾が恩を知らざる質は表され 彼の量り難き 恒忍
 および 大いなる憐れみは 伝えらる

- 輔祭 我等に聖福音經を聴くを賜ふを主神に禱らん。 (詠) 主憐めよ。三次
 輔祭 睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし。
 司祭 衆人に平安。 (詠) 爾の神にも。
 司祭 マトフェイに因る聖福音經の読み。 (詠)

主よ、光榮は なんじに 帰す、光榮は 爾に 帰す

輔祭 謹みて聴くべし。

聖受難の第三福音經を読む。 26章 57 至末節

彼の時イイススを執へたる者彼を曳きて、司祭長カイアファの許に至れり、彼處には学士及び長老等已に集まれり。ペトル遠く彼に随ひて、司祭長の中庭に至り、其竟を觀ん為に内に入りて、下吏等と偕に坐せり。司祭諸長、長老等、及び全公会は、イイススを死に致さん為に、彼に對する妄證を求めたれども、得ざりき、多くの妄證者就きたれども、得ざりき。終に二の妄證者就きて曰く、斯の

人言へり、我は神の殿を毀ち、三日にして之を建つるを能すと。司祭長起ちて、彼に謂へり、爾答ふる所なきか、彼等が爾に對して證する所如何。イイスス黙然たり。司祭長彼に謂へり、我活ける神を以て爾に誓はしむ、我等に告げよ、爾は神の子ハリストスなるか。イイスス之に謂ふ、爾言へり、且我爾等に語ぐ、此より後、爾等は人の子が大能の右に坐し、天の雲に乗りて来るを見ん。其時司祭長己の衣を裂きて曰へり、彼は神をけがせり、何ぞ復證者を求めん、視よ、今爾等は其神をけがすを聞けり。爾等如何に意ふか。彼等答へて曰へり、死に當る。是に於て彼等其面に唾し、彼を撃ち、或者は其頬を批ちて曰へり、ハリストスよ、我等に預言せよ、爾を撃ちし者は誰ぞ。時にペトル外に中庭に坐せるに、一人の婢彼に就きて曰く、爾もガリレヤのイイススと偕に在りき。然れども彼は衆の前に諱みて曰へり、我爾が言ふ所を識らず。彼が門を出づる時、他の婢彼を見て、彼處に在る者に謂ふ、此の人もイイススナヅレイと偕に在りき。彼復諱みて、誓ひて曰へり、我其人を識らず。少頃ありて、彼處に立てる者近づきて、ペトルに謂へり、誠に爾も其黨の一人なり、蓋爾の言語も爾を顕す。其時彼は詛ひ且誓へり、我其人を識らずと。忽鷄鳴けり。ペトルはイイススの彼に、鷄の鳴かざる先に、爾三次我を諱まんと、云ひし言を憶ひ起して、外に出でて痛く哭けり。

(詠) 主よ、光栄は爾の寛忍に帰す。



[第七倡和詞]

<第八調>主よ、不法の者が爾を執へしに、爾忍びて斯く呼べり、爾等牧者を撃ちて、十二の羊たる私の門徒を散らしたれども、我十二軍餘の天使を進むることを能せり。然れども我永く忍ぶ、嘗て我が諸預言者を以て爾等に示しし識り難き密事の成就せられん為なり。主よ、光栄は爾に帰す。

主よ、不法の者が爾を執へしに 爾忍びてかく呼べり

なんじら 牧者を撃ちて、十二の羊たる私の門徒を 散らし

たれども 我十二軍餘の天使を進むることをよく せり

然れども 我 寛 忍 ず かつて我が諸預言者を以て

爾にしめしし 知り難き密事の成就 せられん為 なり

<第八調>ペトルは三たび諱(い)みて、倏彼に言はれしことを悟り、乃痛悔の涙を爾に献げたり、神よ、我を浄め、我を救ひ給へ。

光荣、今も

(生神女讃詞)我等皆聖なる童貞女を救の門美しき樂園、永久の光の雲として讃め歌ひて、彼に言はん、慶べよ。

[第八倡和詞]

<第二調>不法の者よ、言ふべし、我等の救主より何をか聞きたる、彼は律法と諸預言者の教とを述べしに非ずや。然らば如何にして神よりする神言、及び我等の靈の贖罪主たる者をピラトに付さんことを謀りたる。

恒に爾の恩賜を以て慰むる者は呼べり、十字架に釘せらるべしと、諸義人を殺したる者は恩者に代へて犯罪者を釋さんことを求めたり。惟ハリストスよ、爾は黙して彼等の殘虐を忍び給へり、人を愛する主として苦を受けて、我等を救はんことを望みたればなり。

光荣、今も

(生神女讃詞)生神童貞女よ、我等夥しき罪ありて、己に勇なきに因りて、爾より生れし者に祈り給へ、蓋母の禱は多く主宰の慈憐を得べし。至浄の者よ、罪人の祈を棄つる勿れ、我等の為に甘じて苦を受け給ひし者は仁慈にして人を救ふことを能すればなり。

[第九倡和詞]

<第三調>彼等銀三十を約せり、乃値を附けられし者、即イズライリの諸子が値を附けし者の價なり。儆醒せよ、祈禱せよ、誘惑に入らざらん為なり、神は勇めども肉体は弱し、故に儆醒せよ。彼等膽を以て我に食ませ、我が渴ける時醯を以て我に飲ましめたり。主よ、爾我を起し給へ、我彼等に報いん。

光荣、今も

(生神女讃詞)潔き生神女よ、我等異邦よりする者は爾を歌ふ、蓋爾はハリストス我等の神、爾に藉りて人人を詛より釋きたる者を生み給へり。

[小聯禱]

我等復又安和にして云云

高聲 蓋爾は我等の神なり、我等光荣を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」。

[坐誦讃詞]

<第八調>嗚呼何如にイウダ、爾の門徒たりし者は爾を売り付す謀を圖みたる。悪謀者及び不義者は偽を懷きて共に晚餐を食せし後、往きて司祭等に謂へり、爾等我に幾何を與へんか、我爾等に彼の律法を壊り、「スポタ」を汚したる者を付さん。恒忍なる主よ、光荣は爾に帰す。

嗚呼 いかにかにイウダ 爾の門徒たりしもの - は
 爾を売り渡す 謀^{はかりごと}を たくみたる 悪謀者及び不義者は
 偽^{いつわり}りを抱きて晚餐を食せし^ゆのち、 往きて 司祭^{しさい}等に 言えり
 爾等 我に幾^{いく}ばくを 与えんか 我 爾等に彼の律法を破り
 スポタを汚したる者をわたさん 恒忍なる主よ、光栄は爾に 帰す

(三歌斎経では、光栄、今も、同上繰り返す。)

- 輔祭 我等に聖福音経を聴くを賜ふを主神に祷らん。 (詠) 主憐めよ。三次
 輔祭 睿智、肅みて立て、聖福音経を聴くべし。
 司祭 衆人に平安。 (詠) 爾の神にも。
 司祭 イオアンに因る聖福音経の読み。 (詠)

主よ、光栄は なんじに 帰す、光栄は 爾に 帰す

輔祭 謹みて聴くべし。

聖受難の第四福音経 イオアン 54 端 (18:28-19:16)

彼の時イイススを曳きて、カイアフアより公廨に至れり。時已に平坦なり、彼等は公廨に入らざりき、汚されざらん為、即逾越節筵を食するを得ん為なり。ピラト出でて彼等に謂へり、爾等何事を以て此の人を訟ふるか。答へて曰へり、彼若し悪を行ふ者に非ずば、我等彼を爾に解さざりしならん。ピラト彼等に謂へり、爾等彼を取りて、爾等の律法に循ひて、彼を審判せよ。イウデヤ人之に謂へり、我等には人を死に處する権なし、是れイイススが如何なる死を以て死なんとするを指して、言ひし言に應ふを致す。其時ピラト復公廨に入り、イイススを召して、彼に謂へり、爾はイウデヤ人の王なるか。イイスス彼に答へて曰へり、爾己に由りて之を言ふか、抑他の者が私の事を爾に言ひしか。ピラト答へて曰へり、我豈イウデヤ人ならんや、爾の民と司祭諸長とは爾を我に解せり、爾何を為ししか。イイスス答へて曰へり、我が国は此の世に属せず、若し我が国此の世に属せば、

我が諸僕は戦ひて、我がイウデヤ人に付さるるを免れしめしならん、然れども今我が国は此に属せざるなり。ピラト彼に謂へり、然らば爾は王なるか。イイスス答へて曰へり、爾言ふ、我は王なり。我此が為に生れ、此が為に世に来れり、即真実の事を證せん為なり、凡そ真実に属する者は私の聲を聴く。ピラト彼に謂ふ、真実とは何ぞや。此を言ひて後、復出でてイウデヤ人に謂ふ、我は彼に一も罪あるを見ず。然るに爾等には、逾越節に於て我が爾等に一人を釋す例あり、故に我が爾等にイウデヤ人の王を釋さんことを欲するか。衆人復號びて曰へり、斯の人に非ず、乃ワラウワを。ワラウワは盜賊なり。其時ピラトイイススを取りて、鞭てり。兵卒棘の冕を編みて、其首に冠らせ、紫の袍を彼に衣せて、曰へり、イウデヤ人の王、慶べよ、且其頬を批てり。ピラト復外にて、彼等に謂ふ、視よ、我彼を曳きて、爾等の前に出す、爾等が、私の彼に一も罪あるを、見ざることを、知らん為なり。イイスス棘の冕を冠り、紫の袍を衣て、外に出でたり。ピラト彼等に謂ふ、視よ、人なり。司祭諸長と下吏等と彼を見て、號びて曰へり、十字架に釘せよ、十字架に釘せよ。ピラト彼等に謂ふ、爾等彼を取りて、十字架に釘せよ、蓋我彼に罪あるを見ず。イウデヤ人答へて曰へり、我等に律法あり、我が律法に据れば、彼は死すべし、蓋己を神の子と為せり。ピラト此の言を聞きて、益懼れたり。復公廨に入りて、イイススに謂ふ、爾は奚れよりする。然れどもイイスス彼に答を為さざりき。ピラト彼に謂ふ、我に言はざるか、爾豈我に爾を十字架に釘する権あり、亦爾を釋す権あるを知らざるか。イイスス答へて曰へり、上より爾に與へられしに非ざれば、爾我に對して一も権あるなし、故に我を爾に解しし者の罪は更に大なり。是よりピラト彼を釋さんと謀れり。然れどもイウデヤ人號びて曰へり、爾若し此の人を釋さば、ケサリの友に非ず。凡そ己を王と為す者は、ケサリに叛く者なり。ピラト此の言を聞きて、イイススを外に曳き出し、審判座に、「リフォストラトン」、エウレイの言にガウワファと名づくる所に坐せり。其日は逾越節の備日にして、時は約六時なり。ピラトイウデヤ人に謂ふ、視よ、爾等の王なり。然れども彼等號びて曰へり、之を去れ、之を去れ、十字架に釘せよ。ピラト彼等に謂ふ、爾奪の王を釘せんか。司祭諸長對へて曰へり、我等にはケサリの外に王なし。其時ピラト彼を十字架に釘せん為に付せり。

(詠) 主よ、光榮は爾の寛忍に歸す。



[第十倡和詞]

<第6調>光を衣の如く衣る者は／裸体にして審判に立ち／、造りし所の手より頬の批たるるを受けたり、／不法の人人は光榮の主を十字架に釘せり。其時殿の幔は裂け、／日は晦みたり、／萬有の戦ひ慄く所の神の／辱しめらるるを視るに忍びざればなり。我等彼に伏拜せん。／門徒は諱みたり、／盜賊は呼べり、／主よ、爾の国に於て我を記念せよ。

光榮、今も

(生神女讃詞) 諸僕の為に童貞女より身を受け給ひし主よ、世界を平安ならしめ給へ、我等心を合せて、爾人を愛する者を讃榮せん為なり。

[第十一倡和詞]

<第6調>ハリストスよ、爾がエウレイの族に為しし諸善の為に、彼等爾を十字架に釘せんことを

定め、醜と膽とを爾に飲ませたり。主よ、彼等の所為に循ひて與へ給へ、彼等爾の寛容を悟らざりしに因る。

ハリストスよ、エウレイの族は売付を以て足れりとせず、乃其首を揺かして、嘲と譏とを吐きたり。主よ、彼等の、所為に循ひて與へ給へ、彼等爾の攝理を悟らざりしに因る。

地も其震ひしを以て、磐も其裂けたるを以て、エウレイ人を悟らしめざりき、殿の幔も、死者の復活も亦然り。主よ、彼等の所為に循ひて與へ給へ、彼等爾に對して徒に謀りたればなり。

光荣、今も

(生神女讃詞) 生神童貞女、独り潔き、独り讚美せらるる者よ、我等は爾より身を取りし者の神なるを識れり。故に恒に爾を歌ひて崇め讚む。

[第十二偈和詞]

<第8調>主はイウデヤ人に向ひて斯く言ふ、我が民よ、我何をか爾等に為しし、或は何を以て爾等を煩はしし、我爾等の瞽を明かし、癩者を潔くし、榻に在る人を起せり。我が民よ、我何をか爾等に為しし、爾等何をか我に報いたる、「マンナ」に代へて膽、水に代へて醜、歌を愛するに代へて十字架に我を釘せり。我是より復忍びず、我が異邦民を召さん、彼等我を父及び聖神と偕に榮せん、我彼等に永遠の生命を賜はん。

今日殿の幔は不法の者を責めん為に裂かれ、日は主宰の釘せらるるを見て、其光線を匿す。

イズライリの律法師、イウデヤ人及びファリセイ等よ、使徒の会は爾等によぶ、視よ、爾等が毀ちたる殿、視よ、爾等が釘したる羔、爾等又彼を墓に付せり、然れども彼は己の権を以て復活し給へり。イウデヤ人よ、自ら欺く母れ、彼は海に救ひ、野に養ひし者なり。彼は生命なり、光なり、世界の平安なり。

光荣、今も

(生神女讃詞) 慶べよ、光荣の王の門、至上者が独我等の靈の救の為に過りて、猶閉されたるままに留めし所の者や。

[小聯禱]

我等復又安和にして云云

高聲 願はくは爾父と子と聖神の国の権柄は讚揚讚榮せられん、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」。

[坐誦讃詞]

<第8調>神よ、爾カイアフアの前に立てる時、審判者よ、爾ピラトに解されし時、天軍は畏懼に由りて撼けり。罪なき者よ、爾は其時又二人の盜賊の間に木に挙げられて、罪犯者と偕に算へられたり、人を救はん為なり。恒忍の主よ、光荣は爾に歸す。

(三歌齋経では光荣、今も、同上繰り返す。楽譜次ページ)

かみよ、爾カイアフアの前に立てるとき 審判者よ、爾
 ピラトにわたされしとき 天軍は畏れによりて うごけり
 罪なきものよ、 爾二人の盜賊の間に 木に^あ挙げられて
 罪犯者とともに かぞえられたり ^{こうにん}恒忍の主よ、
 光栄は 爾に 帰す

- 輔祭 我等に聖福音經を聴くを賜ふを主神に祷らん。 (詠) 主憐めよ。三次
 輔祭 睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし。
 司祭 衆人に平安。 (詠) 爾の神にも。
 司祭 マトフェイに因る聖福音經の読み。 (詠)

主よ、光栄は なんじに 帰す、光栄は 爾に 帰す

輔祭 謹みて聴くべし。

聖受難の第五福音經 マトフェイ 111 端 27:3-32

彼の時イイススを売りシイウダは其定罪せられたるを見て、悔いて銀三十を司祭諸長と長老等とに返して曰へり、我辜なき血を付して、罪を犯せり。彼等曰へり、我等何ぞ與らん、自ら顧みよ。彼銀を殿に擲ちて出で、往きて自ら縊れたり。司祭諸長銀を取りて曰へり、之を殿の庫に納るるは宜しからず、是れ血の價なればなり。乃相議して、此を以て陶人の田を買ひ、賓旅を瘞る地と為せり。故に其田は、今日に至るまで、血の田と稱へらる。是に於て預言者イエレミヤを以て言はれしこと應へり曰く、彼等銀三十、乃値を付けられし者、即イズライリの諸子が値を付けし者の價を取りて、之を陶人の田の為に與へたり、主の我に示ししが如しと。イイスス方伯の前に立ちしに、方伯彼に問ひて曰へり、爾はイウデヤ人の王なるか。イイスス之に謂へり、爾言ふ。司祭長と長老等と彼を訟へしに、一も答へざりき。時にピラト彼に謂ふ、爾に對して證すること斯く多きを爾聞かざるか。彼其一言にも答へざりき、方伯甚奇むに至れり。節期には、方伯が民の一人の囚、其欲する所の者を釋す例ありき。其時ワラウワと名づくる著しき囚ありしが、民の集りし時、ピラト之に謂へり、二

人の中、我が誰をか爾等に釋さんことを欲する、ワラウワか、抑ハリストスと稱ふるイイスカ。蓋娟嫉に因りて彼を解ししを知れり。方伯が審判座に坐せる時、其妻人を遣して、之に謂へり、爾此の義人に何事をも為す勿れ、蓋我今日夢の中に彼の為に多く苦しめりと。然るに司祭諸長と長老等とは民に唆めて、ワラウワを釋し、イイススを滅さんことを乞はしめたり。方伯彼等に問ひて曰へり、二人の中、我が誰をか爾等に釋さんことを欲する。彼等曰へり、ワラウワを。ピラト曰く、然らば我はハリストスと稱ふるイイススに何を為さんか。皆彼に謂ふ、十字架に釘せらるべし。方伯曰へり、彼は何の悪を行ひしか。然れども彼等愈號びて曰へり、十字架に釘せらるべし。ピラトは何事も益なく、惟亂の滋起るを見て、水を取り、民の前に手を盥ひて曰へり、我此の義人の血に對して罪なし、爾等自ら顧みよ。民皆對へて曰へり、其血は我等及び我等の子孫に帰すべし。其時ワラウワを彼等に釋し、イイススを鞭ちて、十字架に釘せん為に付せり。時に方伯の兵卒イイススを曳きて、公廨に入れ、全營を彼の許に集め、其衣を褫ぎて、**緋**き袍を衣せ、棘の冕を編みて、其首に冠らせ、葦を其右の手に持たせ、彼の前に跪きて、彼に戯れて曰へり、イウデヤ人の王、慶べよ。又彼に唾し、葦を取りて、其首を撃てり。既に戯れ畢りて、其袍を褫ぎ、故の衣を衣せ、十字架に釘せん為に彼を曳き往けり。出づる時、キリネヤの人シモンと名づくる者に遇ひ、之を強ひて、其十字架を負はしめたり。

(詠) 主よ、光榮は爾の寛忍に帰す。



[第十三偈和詞]

<第6調>主よ、イウデヤの会は／ピラトに爾を十字架に釘せんことを求めたり、／彼等は爾の中に咎(とが)を得ずして、／罪あるワラウワを釋(ゆる)し、／忌はしき殺害の罪を継ぎて、／爾義なる者を定罪せり。／主よ、彼等の報(むくい)を彼等に与え給え、／彼等爾に對して徒(いたづらに)に謀りたればなり。

<第6調>司祭等は萬有の畏れ慄き、凡の舌の歌ふ所のハリストス、神の能及び神の智慧なる者の頬を批ち、膽を彼に飲ましめたり。彼は人を愛する主なるに因りて、己の血を以て我等を不法より救はんと欲して、甘じて一切を忍び給へり。』

光榮、今も

(生神女讃詞) 言に藉りて言に踰えて己の造成主を生みし生神女よ、彼に我等の靈を救はんことを祈り給へ。

[第十四偈和詞]

<第8調>血にて手を汚しし盜賊を同行者として受けし主よ、我等をも彼と偕に算へ給へ、爾は至善にして人を愛する主なればなり。

盜賊は十字架の上に僅なる聲を出して、大なる信を顯し、瞬の間に救を得、首先の者として樂園の門を開きて、之に入りたり。其痛悔を受け給ひし主よ、光榮は爾に帰す。

光栄、今も

(生神女讃詞) 天使より世界の喜を受けし者よ、慶べ、爾の造成主及び主を生みし者よ、慶べ、神の母と為るに任へし者よ、慶べ。

[第十五倡和詞]

<第6調>地を水の上に懸けし者は今日木に懸り、諸天使の王は棘の冠を冠らせられ、雲を以て天に衣する者は偽の紫を衣せられ、イオルダンに於てアダムを釋きし者は頬の批たるるを受け、教会の新郎は釘にて釘せられ、童貞女の子は戈にて刺されたり。ハリストスよ、我等爾の苦に伏拜す、ハリストスよ、我等爾の苦に伏拜す、ハリストスよ、我等爾の苦に伏拜す、爾の光栄なる復活をも我等に顯し給へ。

我等はイウデヤ人の如くに祭らざらん、蓋我等の「パスハ」なるハリストスは我等の為に幸られたり、即我等は己を凡の汚より浄めて、潔く彼に祈らん、主よ、起きて我等を救ひ給へ、爾は人を愛する主なればなり

主よ、爾の十字架は爾の人人の為に生命なり、守護なり、我等彼を恃みて、爾釘せられし我等の神を歌ふ、我等を憐み給へ。

光栄、今も

(生神女讃詞) ハリストスよ、爾を生みし者は爾が十字架に懸れるを觀て呼べり、吾の子よ、我が見る所の異しむべき奥義は何ぞや、生命を賜ふ者よ、如何にして身を以て懸りて木の上に死する。

[小聯禱]

我等復又安和にして云云

高聲 蓋爾父と子と聖神の至聖なる名は讃揚せられ、爾の国は讃榮せらる、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」。

[坐誦讃詞]

<第4調>爾は十字架に釘せられて、爾の尊き血を以て我等を律法の詛より贖ひ、戈にて刺されて、人人に不死を流し給へり。我等の救世主よ、光栄は爾に歸す。

(三歌齋経では、光栄、今も、同上繰り返す。)

爾は十字架に釘せられて 爾の尊き血を以て われらを
 律法の詛いより 贖ない 矛にて刺されて 人々に 不死を
 ながしたまえり 我等の救世主よ、光栄は爾に 歸す

輔祭 我等に聖福音經を聴くを賜ふを主神に禱らん。 (詠) 主憐めよ。三次

輔祭 睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし。

司祭 衆人に平安。 (詠) 爾の神にも。

司祭 マルコに因る聖福音經の讀。 (詠) 主よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。



輔祭 謹みて聴くべし。

聖受難の第六福音經 マルコ 67 端 15:16-32

彼の時兵卒イイススを曳きて、中庭の内即公廨に至り、全營を集め、彼に紫袍を衣せ棘の冕を編みて冠らせ、其安を問ひて曰へり、イウデヤ人の王、慶べよ。又葦を以て其首を撃ち、彼に唾し、跪きて彼を拜せり。既に戯れ畢りて、其紫袍を褫ぎ、彼の衣を衣せ、十字架に釘せん為に彼を曳き往けり。或キリネヤの人シモン、即アレキサンドル及びルファの父が、田より来り過ぐるを強ひて、其十字架を負はしめたり。ゴルゴファの處、譯すれば、髑髏の處に曳き至りて、没薬を和へたる酒を彼に飲ませしに、彼受けざりき。彼を十字架に釘せし者は其衣を分ち、孰か何を得んと鬮を取れり。第三時に在りて、彼を十字架に釘せり。其罪の標に書して曰へり、イウデヤ人の王と。彼と偕に二人の盜賊を十字架に釘せり、一人は其右、一人は其左なり。是に於て聖書の言應へり、曰く、罪犯者と偕に算へられたりと。過ぐる者彼を誚り、首を揺かして曰へり、噫殿を毀ちて三日に之を建つる者よ。己を救ひて十字架より下れ。同じく司祭諸長も学士等と偕に嘲りて、相語りて曰へり、他人を救ひて、己を救ふ能はず。ハリストス、イズライリの王、今十字架より下るべし我等が見て彼を信ぜん為なり。

(詠) 主よ、光榮は爾の寛忍に歸す。



[真福詞] 八句を立てて 第4調。

主よ、爾の国に来らん時、我等を憶ひ給へ。

神の貧しき者は福なり、天国は彼等の有なればなり。



泣く者は福なり、彼等慰を得んとすればなり。（以下同様に歌う）

溫柔なる者は福なり、彼等地を嗣がんとすればなり。

義に飢え渴く者は福なり、彼等飽くを得んとすればなり。

アダムは木に縁りて樂園より逐はれ、盜賊は十字架の木に縁りて樂園に入りたり。彼は食ひて造成主の誠命を棄てしに困り、此は共に十字架に釘せられて、爾隠れたる神を承け認めしに困りてなり。救世主よ、我等をも爾の国に於て憶ひ給へ。

矜恤ある者は福なり、彼等矜恤を得んとすればなり。

不法の者は門徒より立法者を買ひ、法を破る者の如く彼をピラトの審判座の前に立てて呼べり、十字架に釘せよ、野に於て彼等に「マンナ」を予へし者を。然れども我等は義なる盜賊に效ひて、信を以て呼ぶ、救世主よ、我等をも爾の国に於て憶ひ給へ。

心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。

殺神者の群、イウデヤの不法なる民は狂ひて、ピラトに呼びて曰へり、無罪なるハリストスを釘し、寤ワラウワを我等の為に赦せ。然れども我等は善智なる盜賊の聲を以て彼に言ふ、救世主よ、我等をも爾の国に於て憶ひ給へ。

和平を行ふ者は福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。

ハリストスよ、爾が生命を施す脅はエデムより出づる河の如く、靈智の樂園たる爾の教会を潤し、是より分れて、源たる四の福音經に流れて、世界に飲ませ、造物を楽しませ、諸民に正しく爾の国に伏拜するを教ふ。

義の為に窘逐せらるる者は福なり、天国は彼等の者なればなり。

爾は我の為に十字架に釘せられたり、我に赦免を賜はん為なり、脅を刺されたり、我に生命の滴を流さん為なり、釘にて付けられたり、我が爾の苦の深きに困りて爾の権能の高きを信ずるを得て爾によばん為なり、生命を賜ふハリストス救世主よ、光榮は爾の十字架及び爾の苦に帰す。

人我の為に爾等を詬り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

ハリストスよ、爾が十字架に釘せらるる時、萬物は靦（み）て慄き、地の基は爾の権能の畏に困りて動き、日は隠れ、殿の幔は破れ、山は震ひ、磐は裂け、信なる盜賊は我等と偕によぶ、救世主よ、爾の国に於て我を憶ひ給へ。

喜び楽しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

主よ爾は十字架に於て我等の書券（かきつけ）を破り、死者の中に入りて彼處の暴虐者を縛り、爾の復活を以て衆を死の械繫（かせ）より釋き給へり。人を愛する主よ、我等此に照されて爾によ

ぶ、救世主よ、我等をも爾の国に於て憶ひ給へ。

光栄は父と子と聖神に帰す



我等信者皆意を同じくして、父、子、聖神、三位に於て惟一なる神性、混合せずして單一なる、分れざる、近づき難き神を宜しきに合ひて讚榮するを得んことを祈らん。我等彼に因りて火の苦を免る。

今も何時も世々にアミン (楽譜次ページ)

(生神女讃詞) 至仁なる主宰ハリストスよ、我等は爾の母、身にて種なく爾を生み、生みて後にも貞操を壊らざる実に童貞女なる者を祈禱の為に爾に進めて、我が諸罪の赦を賜はんことを求む、蓋我等常によぶ、救世主よ、爾の国に於て我等を憶ひ給へ。



[小聯禱]

我等復又安和にして云云

高聲 蓋天の衆軍爾を讚揚す、我等も光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」。

[ポロキメン] 第4調、

共に我が外衣を分ち、我が裏衣をくじせり。

(句) 我が神よ、我が神よ、我に聴き給へ、何ぞ我を遣てたる。



輔祭 我等に聖福音經を聴くを賜ふを主神に禱らん。 (詠) 主憐めよ。三次
 輔祭 睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし。
 司祭 衆人に平安。 (詠) 爾の神にも。
 司祭 マトフェイに因る聖福音經の読み。 (詠)



輔祭 謹みて聴くべし。

聖受難の第七福音經 マトフェイ 103 端 27:33-54

彼の時兵卒ゴルゴファと云ふ處、譯すれば、髑髏の處に來りて、醋に膽を和へて、イイススに飲ましめたるに、之を嘗めて、飲むことを欲せざりき。彼を十字架に釘せし者は鬮を取りて、其衣を分ち、而して坐して、彼處に彼を守れり。又其罪を書せる標を其首の上に置けり、曰く、此れ乃イイスス、イウデヤ人の王と。其時二人の盜賊は彼と偕に十字架に釘せられたり、一人は其右、一人は其左なり。過ぐる者彼を誚り、首を揺かして曰へり。殿を毀ちて三日に之を建つる者よ、己を救へ、若し爾神の子ならば、十字架より下れ、同じく司祭諸長も、学士、長老、ファリセイ等と偕に嘲りて曰へり、他人を救ひて、己を救ふ能はず、若し彼イズライリの王ならば、今十字架より下るべし、然らば我等彼を信ぜん。神を恃めり、若し神彼を悦ばば、今彼を拯ふべし、蓋彼は我神の子なりと云へり。彼と偕に十字架に釘せられたる盜賊も亦彼を詬れり。第六時より晦冥は全地を蔽ひて、第九時に至れり。第九時の頃、イイスス大聲に呼びて曰へり、「イリ、イリ、ラマ、サワファニ」即我が神よ、何ぞ我を遺てたる。彼處に立てる者の中、或人之を聞きて曰へり、彼はイリヤを呼ぶなり。其中の一人直に走り、海絨を取りて、醋を盈たし、葦に束ねて、彼に飲ましめたり。餘の者曰へり、姑く舍け、イリヤ來りて、彼を救ふや否やを觀ん。イイスス復大聲に呼びて、氣絶えたり。視よ、殿の幔は、上より下に至るまで裂けて、二となり、地震ひ、磐裂け、墓啓けて、寝ねたる聖人の身は多く復活し、彼の復活の後、墓よりて、聖なる城に入り、多くの者に現れたり。百夫長及び之と偕にイイススを守れる者は、地震と有りし事をとを見て、甚しく懼れて曰へり、此れ誠に神の子なり。

(詠) 主よ、光榮は爾の寛忍に帰す。



[第五十聖詠]

神よ、爾の大なる憐に因りて我を憐み、爾が恵の多きに因りて我の不法を抹し給へ。屢我を我が不

法より洗ひ、我を我が罪より清め給へ、蓋我は我が不法を知る、私の罪は常に我が前に在り。我は爾獨爾に罪を犯し、悪を爾の目の前に行へり、爾は爾の審断に義にして、爾の裁判に公なり。視よ、我は不法に於て生まれ、我が母は罪に於て我を生めり。視よ、爾は心に真実のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我に顕せり。「イソップ」を以て我に沃げ、然せば我潔くならん、我を滌へ、然せば我雪より白くならん。我に喜と樂とを聞かせ給へ、然せば爾に折られし骨は悦ばん。爾の顔を我が罪より避け、我が盡くの不法を抹し給へ。神よ、潔き心を我に造れ、正しき霊を私の衷に改め給へ。

我を爾の顔より逐ふこと母れ、爾の聖神を我より取り上ぐることを母れ。爾が救の喜を我に還せ、主宰たる神を以て我を固め給へ。我不法の者に爾の道を教へん、不虔の者は爾に帰らんとす。神よ、我が救の神よ、我を血より救ひ給へ、然せば我が舌は爾の義を讃め揚げん。主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げん、蓋爾は祭を欲せず、欲すれば我之を献らん、爾は燔祭を喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔の霊なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給はず。主よ、爾の恵に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給へ。其時に爾義の祭、献物と燔祭とを喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に犢を奠へんとす。

輔祭 我等に聖福音經を聴くを賜ふを主神に祷らん。

(詠) 主憐めよ三次

輔祭 睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし。

司祭 衆人に平安。

(詠) 爾の神にも

司祭 ルカに因る聖福音經の読み。

(詠)



輔祭 謹みて聴くべし。

聖受難の第八聖福音經 ルカ 111 端 23:32-49

彼の時イイススと偕に亦二人の犯罪者を死に處せん為に曳けり。髑髏と名づくる處に來りて、彼處に彼及び二の犯罪者を十字架に釘せり、一人は其右、一人は左なり。イイスス曰へり、父よ、彼等を赦せ、蓋彼等は為す所を知らず。人鬪を取りて、其衣を分てり。民立ちて觀たり、有司等も衆と與に嘲りて曰へり、彼は他人を救へり、若し彼ハリストス、神の選びたる者ならば、己を救ふべし。兵卒も亦彼に戯れ、近づきて、醋を與へて曰へり、爾若しイウデヤ人の王ならば、己を救へ。彼の上にエルリン、ロマ、エウレイの文字を以て書したる標あり、曰く、是はイウデヤ人の王なりと。懸けられたる犯罪者の一人彼を誚りて曰へり、爾若しハリストスならば、己と我等とを救へ。他の一人之を戒めて曰へり、爾豈神を畏れざるか、蓋爾も同じく定罪せられたり、惟我等に在りては當然なり、我が行に稱へる事を受くればなり、然れども彼は一も不善を行はざりき。乃イイススに對ひて曰へり、主よ、爾の國に來らん時、我を記念せよ。イイスス彼に謂へり、我誠に爾に語り、爾今日我と偕に樂園に在らん。時約六時なり、晦冥は全地を蔽ひて第九時に至れり。日は晦み、殿の幔は中より裂けたり。イイスス大聲に呼びて曰へり、父よ、我が神を爾の手に託す。之を言ひて、氣絶えたり。百夫長成りし事を見て、神を讚榮して曰へり、此の人は誠に義人なり。之を觀ん為に

聚まりたる衆民は、成りし事を見て、膺を拊ちて返れり。彼の相識及びガリレヤより彼に従ひし婦等、皆遠く立ちて、此等の事を見たり。

(詠) 主よ、光栄は爾の寛忍に帰す。



[カノン] 三歌頌を歌ふ、コスマ師の作。イルモス二次、讃詞十二句に。後にイルモス、兩(詠)共に。第六調。

第五歌頌

[イルモス] 神の言よ、我爾に朝の禱を奉る、蓋爾は仁慈に因りて、変らざる者にして己を罄(つく)し、苦しまざる者にして苦を受くるに至れり。人を愛する主よ、我陥りし者に平安を與へ給へ。



附誦 我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

ハリストスよ、爾の役者は今足を濯ひ、神聖なる機密を領くるを以て浄められて、爾人を愛する主を歌ひて、爾と偕にシオンよりエレオンの大山に登れり。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

爾言へり、友よ、見よ、懼るる母れ、蓋今我が不法者の手に執はれて殺さるる時邇づけり。爾等皆我を遺てて散らん、然れども我復爾等を聚めて、我人を愛する者を傳へしめん。

[イルモス] 神の言よ、我爾に朝の禱を奉る、蓋爾は仁慈に因りて、変らざる者にして己を罄し、苦しまざる者にして苦を受くるに至れり。人を愛する主よ、我陥りし者に平安を與へ給へ。

[小聯禱]

我等復又安和にして云云

高聲 蓋爾は平安の王及び我が霊の救主なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」。

[小讃詞] 第八調。

皆来りて、我等の為に十字架に釘せられし者を歌はん、蓋マリヤは彼を木の上に観て云へり、爾十字架を忍べども、我の子及び我の神なり。

[同讃詞]

牝羊は其羔が屠戮に牽かるるを見て、マリヤは痛く愁しみて、他の婦と偕に後に随ひて、斯くよべり、子よ、何に往くか、何為れぞ疾く進む、豈ガリレヤのカナに復婚筵ありて、爾今彼處に急ぎて、彼等の為に水より酒を成さんとするか。子よ、我爾と偕に往かんか、或は爾を俟たんか。言よ、我に言を與へよ、我を淨く守りし者よ、黙して我を過ぐる母れ、蓋爾は我の子及び我の神なり。

第八歌頌

[イルモス] 神聖なる少者は神に逆ふ不虔の柱を折(くじ)けり、ハリストスに拂(もと)る不法者の会は徒に謀りて、其手に生命を保ち、萬物の崇め讃めて世世に讃栄する者を殺さんと欲す。

神聖なる少者は 神に逆う不虔の柱を くじ けり

ハリストスに もとる不法者の会は 徒^{いたずら}にはかりて

その手に 生命^{いのち}を保ち 萬^{ばん}ぶ-つの あがめ讃めて、

世世に 讃栄するものを ころさ-んと 欲-す

(附誦) 我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

ハリストスよ、爾は門徒に謂へり、今爾等の臉より睡を拂ひて、祈禱に倣醒せよ、誘惑に陥らざらん為なり、シモン、爾特に然すべし、蓋力の大なる者には誘惑も亦大なり。ペトルよ、我萬物の崇め讃めて世世に讃栄する者を知るべし。

(附誦) 我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

ペトルよべり、主宰よ、我が口を以て永く卑しき言を言はざらん、衆爾を諱むとも、我忠信の者として爾と偕に死なん、血肉に非ず、乃爾の父は我に爾萬物の崇め讃めて世世に讃栄する者を示

し給へり。

(附誦) 我等の神よ、光荣は爾に帰す、光荣は爾に帰す。

主言へり、人よ、爾は神聖なる智慧と明悟との深きを究め盡ししに非ず、我が定制の淵を測りしに非ず。故に肉身なるに因りて高ぶる母れ、蓋爾は三次我萬物の崇め讃めて世世に讃栄する者を諱まん。

父と子と聖神の一なる神を讃めあげん、今も何時も世々にアミン

主言へり、シモンペトルよ、爾諾はずと雖、速に其言はれしことの実なるを知らん、一人の婢も近づきて爾を懼れしめん。然れども爾痛く泣きて、我萬物の崇め讃めて世世に讃栄する者の仁慈なるを見ん。

我等主を讃め崇め、伏し拜みて、世世に歌ひ讃めん。

[イルモス] 神聖なる少者は神に逆ふ不虔の柱を折けり、ハリストスに拂る不法者の会は徒に謀りて、其手に生命を保ち、萬物の崇め讃めて世世に讃栄する者を殺さんと欲す。

第九歌頌

[イルモス] ヘルウィムより尊く、セラフィムに並なく栄え、貞操を壊らずして神言を生みし実の生神女たる爾を崇め讃む。

ヘルウィムより とうとく セラフィムに並びなく
 さかえ みさおを 壊らずして 神言を生みし、
 じつの 生 --- 神女たる なんじを あがめ 讃む

(附誦) 我等の神よ、光荣は爾に帰す、光荣は爾に帰す。

ハリストスよ、神を疾む毒悪の群、神を殺す狡猾の会は爾を環りて、爾萬有の造成主、我等の崇め讃むる者を罪人として曳けり。

(附誦) 我等の神よ、光荣は爾に帰す、光荣は爾に帰す。

律法を悟らずして、徒に預言者の言を学びたる不虔者は義に背きて、爾萬有の主宰、我等の崇め讃むる者を羊の如く屠らん為に曳けり。

(附誦) 我等の神よ、光荣は爾に帰す、光荣は爾に帰す。

司祭等は学士等と偕に嫉妬の悪に刺されて、萬民に賜はりたる生命、性に因りて生命を施す主、我等の崇め讃むる者を殺さん為に解せり。

光荣は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

王よ、彼等は犬の群の如く爾を環り、爾の頬を批ち、爾に問ひ、爾を妄證せり、然るを爾萬事を忍びて、萬民を救ひ給へり。

[イルモス] ヘルウィムより尊く、セラフィムに並なく栄え、貞操を壊らずして神言を生みし実の生神女たる爾を崇め讃む。

[小聯禱]

我等復又安和にして云云

高聲 蓋爾は平安の王及び我が霊の救主なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」。

[差遣詞] 三次

主よ、爾は善智なる盜賊を一時に樂園に入るに堪ふる者と為せり、我をも十字架の木にて照して救ひ給へ。

光耀歌



主-よ なんじは 善智なる 盜ぞくを
 い 一 時 に ら く 園 に 入 る も の と
 な 為 せ- - - り わ れ を も
 十 字 架 の 木 に て
 照 ら し て す く い た ま - - え

(3回繰り返す)

輔祭 我等に聖福音經を聴くを賜ふを主神に禱らん。 (詠) 主憐めよ 三次

輔祭 睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし。

司祭 衆人に平安。 (詠) 爾の神にも

司祭 イオアンに因る聖福音經の読。 (詠)



主よ、光栄は なんじに 帰す、光栄は 爾に 帰-す

輔祭 謹みて聴くべし。

聖受難の第九福音経 イオアン 19:25-37

彼の時イイススの母と、母の姉妹クレヲパの妻マリヤと、マリヤ「マグダリナ」と、其十字架の旁に立てり。イイススは其母及び愛する所の門徒の此に立てるを見て、母に謂ふ、婦よ、視よ、爾の子なり。次ぎて門徒に謂ふ、視よ、爾の母なり。其時より此の門徒彼を己の家に取り。厥後イイスス一切の事已に成りたるを知りて、聖書に應ひて曰ふ、我渴く。彼處に醋の満ちたる器の置けるあり、兵卒海絨を醋に漬し、牛膝草に束ねて、彼の口に遞れり。イイスス醋を受けし後曰く、成れり。乃首を俯して、神を付せり。其日は備節日にして、彼の安息日は大なる日なるに因りて、イウデヤ人は安息日に屍を十字架に留めざらん為、ピラトに、彼等の脛を折りて、屍を取り下さんことを請へり。故に兵卒来りて、彼と偕に十字架に釘せられし第一の者の脛を折り、第二の者にも亦然せり。イイススに來りて、其已に死したるを見れば、彼の脛を折らざりき、然れども一人の兵卒戈を以て其の脅を刺せり、忽血と水と出でたり。見し者は證を作せり、其證は真なり、彼は言ふ所の真なるを知る、爾等をして信ぜしめん為なり。蓋斯の事の成りしは、聖書の應ふを致す、云く、其骨は折られざらんと。聖書の他篇に又云ふ、彼等は其刺しし者を觀んと。

(詠) 主よ、光榮は爾の寛忍に歸す。



【第148聖詠】

天より主を讃め揚げよ、至高きに彼を讃め揚げよ。讃歌は爾神に歸す。其悉くの天使よ、彼を讃め揚げよ、其悉くの軍よ、彼を讃め揚げよ、讃歌は爾神に歸す。日と月よ、彼を讃め揚げよ、悉くの光る星よ、彼を讃め揚げよ。諸天の天と天より上なる水よ、彼を讃め揚げよ。主の名を讃め揚ぐべし、蓋彼言ひたれば、即成り、命じたれば、即造られたり、彼は之を立てて世世に至らしめ、則を與えて之を躰えざらしめん。地より主を讃め揚げよ、大魚と悉くの淵、火と霰、雪と霧、主の言葉に従う暴風、山と悉くの陵、果の樹と悉くの栢香木、野獸と諸の家畜、匍う物と飛ぶ鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少年と處女、翁と童は、主の名を讃め揚ぐべし、蓋惟其名は高く挙げられ、其光榮は天地に徧し。彼は其民の角を高くし、其諸聖人、イズライリの諸子、彼に親しき民の榮を高くせり。

神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。

【讃頌】自調 <第3調>

我が首生の子イズライリは二の悪事を行へり、我生命の水の泉を遺てて、己の為に壞滅の井を掘れり、我を木に釘し、求めてワラウワを釋せり。天は此に縁りて畏れ、日は其光線を匿せり、惟爾イズライリよ、愧ぢざりき、乃我を死に付せり。聖なる父よ、彼等を赦せ、蓋彼等は為しし所を知らず。

(句) 其権能に依りて彼を讃め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讃め揚げよ。

我が首生の子イズライリは二の悪事を行へり、我生命の水の泉を遺てて、己の為に壞滅の井を掘れり、我を木に釘し、求めてワラウワを釋せり。天は此に縁りて畏れ、日は其光線を匿せり、惟爾イズライリよ、愧ぢざりき、乃我を死に付せり。聖なる父よ、彼等を赦せ、蓋彼等は為しし所

を知らず。

(句) 角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。

爾の聖なる肉身の百体は各我等の為に辱を忍べり、首は棘を、面は唾せらるることを、顛は批たるるることを、口は醜に和へたる膽を味ふことを、耳は不虔なる褻瀆(けがし)を、背は鞭うたるるることを、手は葦を、全体は十字架に舒べらるるることを、四肢は釘を、脅は戈を忍べり。我等の為に苦を受けて、我等を苦より脱れしめ、仁慈を以て我等に降りて、我等を挙げし全能なる救世主よ、我等を憐み給へ。

(句) 鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

ハリストスよ、爾が釘せられし時、萬物は靦て戦き、地の基は爾の権能を畏るるに因りて震へり。蓋爾今日挙げられしに、エウレイの族は亡び、殿の幔は二に裂け、死者は墓より復活せり。百夫長は奇蹟を見て懼れたり。爾の母は前に立ち、母の心を以て哭きてよべり、我爾が定罪せられし者の如く、裸にして木に懸れるを見て、如何ぞ哭かざらん、如何ぞ我が胸を擗たざらん。十字架に釘せられ、瘞られ、死より復活せし主よ、光栄は爾に帰す。

光栄は父と子と聖神に帰す。

<第6調>我が衣を我より褌(は)ぎて、絳(あか)き袍(ころも)を我に衣(き)せ、棘(いばら)の冕(かんむり)を我が首(こうべ)に冠らせ、杖を我が右の手に持たせたり、我が彼等を撃ちて陶器の如く碎かん為なり。

今も何時も世世に、「アミン」

我が背を傷の為に予(あた)へ、我が面(おもて)を唾(つばき)せらるることより避けざりき、ピラトの審判座の前に立ち、十字架を忍べり、世界を救はん為なり。

輔祭 我等に聖福音經を聴くを賜ふを主神に禱らん。(詠) 主憐めよ 三次

輔祭 睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし。

司祭 衆人に平安。(詠) 爾の神にも

司祭 マルコに因る聖福音經の読。(詠) 主よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す



輔祭 謹みて聴くべし。

聖受難の第十福音經 マルコ 69 端 15:43-47

彼の時アリマアエヤの人イオシフ、貴き議士、自らも神の国を俟てる者は来り、毅然としてピラトの許に入りて、イイススの屍を求めたり。ピラト其已に死せしを奇み、百夫長を召して、彼死して久しきかと問ひ、百夫長より之を知りて、屍をイオシフに與へたり。彼は布を買ひ、之を下して布に裹み、之を磐に鑿ちたる墓に置き、石を墓の門に轉せり。マリヤ「マグダリナ」及びイオシヤの母マリヤは彼を置きたる處を見たり。

(詠) 主よ、光栄は爾の寛忍に帰す。



誦経 主我等の神よ、光栄は爾に帰す、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、「アミン」。
光栄は爾我等に光を顕しし主に帰す。

至高きには光栄神に帰し、地には平安降り、人には恵臨めり。主天の王、神父全能者よ、主独生の子イイススハリストス、及び聖神よ、爾の大なる光栄に因りて、我等爾を崇め、爾を讃め揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌ひ、爾に感謝す。主神よ、神の羔、父の子、世の罪を任ひし者よ、我等を憐み給へ、世の諸の罪を任ひし者よ、我等の祷を納れ給へ。父の右に坐する者よ、我等を憐み給へ。爾は独聖なり、爾は独主イイススハリストス、神父の光栄を顕す者なればなり、「アミン」。

我日日に爾を讃め揚げ、爾の名を世世に崇め歌はん。

主よ、爾は世世我等の避所たり。

我曾て言へり、主よ、我を憐み、我が霊を醫し給へ、我罪を爾に得たればなり。主よ、爾に趨り附く、爾の旨を行ふを我に教へ給へ、爾は私の神、生命の源は爾に在ればなり、我等爾の光に於て光を觀ん。憐を爾を知る者に恒に垂れ給へ。

主よ、我等を守り、罪なくして此の日を度らせ給へ。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃められ、爾の名は世世に尊み歌はる、「アミン」。

主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給へ。主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に訓へ給へ。主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に悟らせ給へ。聖なる者よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠にて我を照し給へ。

主よ、爾の憐は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ。讃は爾に帰し、歌は爾に帰し、光栄は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

[増聯祷]

我等、主の前に我が祷を増し加えん。 (詠) 主憐めよ

神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救ひ憐み護れよ。 (詠) 主憐めよ

此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む。 (詠) 主賜へよ

平安の天使、正しき教導師、我が霊体の守護者を賜はんことを主に求む。

我等の罪と過ちとを宥め赦さんことを主に求む。

我等の霊に善にして益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む。

我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む。

我等の生命の終りがハリスティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハリストスの畏るべき審判において宜しき對をなすを賜はんことを主に求む。

至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身、及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

(詠) 主爾に

蓋爾は仁慈と慈憐と仁愛との神なり。我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」

司祭 衆人に平安。

(詠) 爾の神にも

輔祭 我等の首を主に屈めん。

(詠) 主爾に

司祭 蓋我が神よ、我等を憐みて救ふこと爾に帰す、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

輔祭 我等に聖福音經を聴くを賜ふを主神に禱らん。

(詠) 主憐めよ三次

輔祭 睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし。

司祭 衆人に平安。

(詠) 爾の神にも

司祭 イオアンに因る聖福音經の讀。

(詠)



輔祭 謹みて聴くべし。

聖受難の第十一福音經 イオアン 62 端 19:38—終わり

彼の時アリマフェヤの人イオシフ、イイススの門徒にして、唯イウデヤ人を懼るるに因りて、自ら隠したる者は、ピラトにイイススの屍を取るを許さんことを請へり、ピラト之を許したれば、彼来りて、イイススの屍を取れり。又ニコディム、曩に夜間イイススに來りし者は、没薬と蘆薈とを合せたる者約百斤を攜へて來れり。彼等イイススの屍を取り、布を以て、香料と與に之を裹めり、イウデヤ人の葬の例の如し。彼が十字架に釘せられし所に園あり、園の中に未だ曾て人の葬られざる新なる墓あり。其日はイウデヤ人の備節日なるに因りて、イイススを彼處に置きたり、墓の近かりし故なり。

(詠) 主よ、光榮は爾の寛忍に帰す。



[挿句のスティヒラ] 自調、兩(詠)共に。

<第1調>ハリストスよ、悉くの造物は爾が十字架に懸れるを覩て、畏懼に因りて変ぜり、日は晦み、地の基は震へり、萬物を造りし者と偕に萬物は苦めり。甘じて我等の為に忍びし主よ、光榮は爾に帰す。

(句) 共に我が外衣を分ち、我が裏衣をくじせり。 <第2調>

不度不法の民よ、何為れぞ、徒に謀る、何為れぞ萬有の生命を死に定めたる。大なる哉奇蹟、世界の造成主は不法者の手に付され、人を愛する者は木の上に挙げらる、地獄にある囚人、恒忍なる主よ、光榮は爾に帰すとよぶ者を釋かん為なり。

(句) 膽を以て我に食ませ、我が渴ける時醯を以て我に飲ましめたり。

言よ、無玷なる童貞女は今日爾が十字架に挙げらるるを觀て、母の情を以て泣き、大に心を傷め、靈の深處より痛く歎き、膺を拊ちて憂ひて呼べり、哀しい哉神聖なる子や、哀しい哉世界の光や、神の羔よ、何ぞ我が目より隠れたる。故に無形の軍は慄きて曰へり、測り難き主よ、光荣は爾に歸す。

(句) 神我が古世よりの王は救を地の中に作せり。

ハリストスよ、種なく爾を生みし者は爾萬物の造成主及び神が木に懸れるを觀て、悲しく呼べり、吾が子よ、爾が姿容の美しきは何に隠れたる。我爾が非義に十字架に釘せらるるを見るに忍びず、速に起きよ、我も爾が死よりの三日目の復活を觀ん為なり。

光荣は父と子と聖神に歸す<第8調>

主よ、爾十字架に上れるに、畏懼と戦慄とは造物に及べり。爾地には爾を釘する者を呑まんことを禁じ、地獄には囚者を釋して、人人の復新することを命じ給へり。生死者の審判者よ、爾は死に非ずして生を賜はん為に來れり。人を愛する主よ、光荣は爾に歸す。

今も何時も世々に、アミン<第6調>

不義なる審判者は己に裁決の筆を潤し、イイススは定罪せられて十字架に定めらる。造物は主が十字架に在るを見て苦しむ。肉体の性にて我が為に苦を受くる仁慈の主よ、光荣は爾に歸す。

輔祭 我等に聖福音經を聴くを賜ふを主神に禱らん。 (詠) 主憐めよ 三次

輔祭 睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし。

司祭 衆人に平安。 (詠) 爾の神にも

司祭 マトフェイに因る聖福音經の讀。 (詠) 主よ、光荣は爾に歸す、光荣は爾に歸す



輔祭 謹みて聴くべし。

聖受難第十二福音經 マトフェイ27:62-終わり

明日、即備節日の翌日、司祭諸長とファリセイ等とピラトの許に集まりて謂へり、主よ我憶ひ起すに、彼の惑はず者尚生ける時、我三日の後に復活せんと言へり。是の故に命じて三日に至るまで、墓を固めしめよ、恐らくは其門徒來りて、彼を竊み、民に向ひて、彼は死より復活せりと言はん、然らば後の惑は先より更に甚しからん。ピラト彼等に謂へり、爾等に番兵あり、往きて、爾等の意に任せて、之を固めよ。彼等往きて、石に封印し、番兵をして墓を固めしめたり。

(詠) 主よ、光荣は爾の寛忍に歸す。



至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌ひ、爾の憐を朝に宣べ、爾の真を夜に宣ぶるは美なる哉。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の国は来り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋国と権能と光栄は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」。

〔讃詞〕 (第四調)

爾は十字架に釘せられて、爾の尊き血を以て我等を律法の詛より贖ひ、戈にて刺されて、人人に不死を流し給へり、我等の救世主よ、光栄は爾に帰す。

〔重聯禱〕

輔祭 神や、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ。爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

(詠) 主憐めよ、(3次)

輔祭 又我が国の天皇及び国を司る者の為に禱る、

輔祭 又教会を司る我等の主教(某)、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の為に禱る、

輔祭 又ハリストスを愛する悉くの皇軍の為に禱る、

輔祭 又恒に記憶せらる福たる此の聖堂の建立者、及び已に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の為に禱る、

輔祭 又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐・生命・平安・壮健・救贖・眷顧・寛宥及び諸罪の赦を賜はんが為に禱る、

輔祭 又此の至尊なる聖堂に物を献り、善業を行ひ、之に勞し、之に歌ひ、及び此に立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の為に禱る、

司祭 (高声) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

輔祭 睿智

(詠) 福を降せ

司祭 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に

(詠) 「アミン」

神や、我が国の天皇と、正教会の教と、正教のすべての「ハリストティアニン」等を永く守り給へ、

司祭 至聖なる生神女や、我等を救ひ給へ、

（詠） ヘルビムより尊くセラフィムに並びなく栄え、貞操をやぶらずして神言を生みし実の生神女たる爾を崇め讃む、

司祭 ハリストス神我等の特や、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す、

（詠） 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に「アミン」、主憐めよ（3次）福を降せ、

司祭（発放詞）世界の救の為に唾せらるること、笞うたるること、頬の批たるること、十字架及び死を忍び給ひしハリストス我等の真の神は、其至浄なる母、光栄にして讃美たる聖使徒、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み救はん、彼は善にして人を愛する主なればなり。

「アミン」

【萬寿詞】 神よ、我が国の天皇を、及び国を司る者、我等の（府）主教及び正教のハリスティアニン等を 幾とせにも護り給え。